

日本中國學會報 第75集 抜刷
2023年10月7日 発行

学界展望 (語学)

秋谷	裕幸
橋本	貴子
宮島	和也
楊	安娜
塩山	正純
加納	希美
濱田	武志
小川	典子

時の人々の日常を紹介している。その内容は、漢詩ならではの語句の追究から、漢詩人の懐事情、ペットへの眼差しに至るまで、誰もが興味を引く内容となっている。

時代を通じて論じられた研究書として、「総記」でも言及されているが、王晓平『中日文学交流史』上・下（國久健太訳、グローバル科学文化出版）と高田宗平編『日本漢籍受容史—日本文化の基層』（八木書店）とが刊行されている。『中日文学交流史』上冊では、日中文学の共有形体である漢字、遣唐使集団の漢文学の播種、日本歌学の礎と漢唐詩学など、室町時代に至るまでの中日交流に関する諸相が述べられ、下冊では、日本前近代小説の勃興と中国文化との関連、明清文学と江戸文学の庶民性、19世紀における日本知識分子の漢文学教養など、江戸時代から明治時代に至るまでの中日交流に関する諸相が述べられている。『日本漢籍受容史』では、日本における出版文化を解説した後、前近代の漢籍受容の様相について、24名の論考と4名のコラムを取めている。第一部古代、第二部中世、第三部近世、第四部文献研究で構成され、それぞれの部において、漢籍に関わった人物がどのような人物であったのか、どのような漢籍を読み、どのような思想を有していたのか、特定の漢籍がどのように受容されたのか論じられており、時代毎の漢籍受容の様相・特徴を浮き彫りにしている。

日本における中国の様々な資料を考察することによって文化の特徴を見出そうとして出版されたのが、アジア遊学275『唐物』とは何か：舶載品をめぐる文化形成と交流』（勉強出版）である。書物や山水画を始め、文具や陶器に至るまで、「唐物」が日本に伝来し、文化装置として機能し、〈漢〉の文化として権威化したり、〈和〉の文化と融合したりする様相を紹介している。コラムを含めて26名もの執筆者が、それぞれの分野の「唐物」を取り上げ、一般読者向けに分かりやすく書いており、興味深い内容となっている。

これまで日本における中国文学の受容について論じた稿は多く見てきたが、中国における日本漢文学の受容についての論考は殆ど見たことがない。この視点から研究を進め、その成果を著したのが、「元・明・清」の項でも言及した蔡毅『清代における日本漢文学の受容』（汲古書院）である。第一部では、清客が日本人の漢詩を持ち帰っていた事象を詳細に示し、第二部では、黄遵憲・梁啓超等が来日して日本文人と交流した様相や、兪樾の編集した『東瀛詩選』が流布したことを示し、日本漢詩が逆輸入された様相を明らかにしている。さらに第三部では、日本の漢文作品、具体的には頼山陽の『日本外史』が西伝した様相を明らかにしている。（太田亨）

●語学

はじめに

学界展望（語学）は、日本中国語学会・学界展望編集委員会（委員長・秋谷裕幸）が担当する。原則として2022年1月から12月までに日本国内で公刊された著書および学術論文を対象とするとともに、重要な研究成果については海外で公刊された成果にも言

及する。

研究分野の分類および執筆者は以下の通りである。昨年からの変更はない。

音韻： 橋本貴子（公立小松大学）
文字・訓話： 宮島和也（成蹊大学）
文法・語彙（上中古）： 楊安娜（北海学園大学）
文法・語彙（近代）： 塩山正純（愛知大学）
文法・語彙（現代）： 加納希美（金沢大学）
方言： 濱田武志（神戸市外国語大学）
教育： 小川典子（愛知大学）

「はじめに」及び全体の調整は秋谷裕幸（愛媛大学）が担当した。

文中で用いた学術誌の略号は以下の通り。いずれも 2022 年に出版されたものである。

『中』 『中国語学』 269 号（日本中国語学会）
『現代』 『現代中国語研究』 第 24 期（朝日出版社）
『中教』 『中国語教育』 第 20 号（中国語教育学会）
『岩田』 《岩田礼教授荣休纪念论文集》編輯組編『岩田礼教授荣休纪念论文集』（上
下巻）（日本地理言語学会）DOI: <https://doi.org/10.5281/zenodo.6342364>

『岩田』は、音韻、形態、語彙、文法、方言等各方面の論文 40 本以上を収め、頁数は 2 巻で計約 800 を数える。この充実した論文集のオンライン公開は学界に裨益するところ大であろう。（秋谷裕幸）

一、音韻

上古音について。戦国文字資料を扱った研究として、野原将揮「構擬上古音 *Kr- : 以《安大簡》「緜」為例」（『聲韻論叢』28）がある。かつて Sergej Jaxontov は諧声字、中古音二等韻の分布、他言語との比較に基づいて、上古音の介音 *-l- を再構した。*-l- は後に李方桂や Axel Schuessler によって *-r- と修正され、近年では多くの研究者がこの *-r- 仮説に従っている。野原論文は『安徽大学蔵戦国竹簡』において *-r- 仮説の根拠となる通假例が存在することを指摘する。遠藤光暁氏は近年の上古音研究の目覚ましい進展を承けて、日朝最古層漢字音の研究を精力的に進めている。遠藤光暁「『三国史記』地名漢字の通用例に反映した清濁合流の地理分布」（『経済研究』14）、遠藤光暁「最古期日朝漢字音における末尾音の弱化・脱落」（『青山経済論集』73(4)）は朝鮮資料の古い漢字音に頭子音の清濁合流および韻尾の弱化・脱落を示す音通例が見られることを指摘し、更に日本の 7 世紀以前の漢字音との関係性にも注目する。遠藤光暁「日朝最古層漢字音所反映の上古方音札記」（陶寰・盛益民・黄河主编『方言比较与吴语史研究：石汝杰教授荣休纪念论文集』中西书局）は朝鮮および日本の古い漢字音が反映する方言のない上古音の特徴、即ち魚部の -i への変化、去声 -s の痕跡、第一口蓋化以前の ki 保存に関する問題点を整理し、基礎方言の問題にも言及する。

中古音について。平山久雄『中古音講義』（汲古書院）が刊行された。平山氏が 1980 年代～1990 年代に主に東京大学で行った講義録を、岩田礼、太田斎両氏の助力により

まとめたものである。日本の中国語音韻史研究を長年導いてこられた平山氏の学問のエッセンスに誰もが触れられるようになったことは、実に意義深い。反切資料に関する研究としては、太田斎「重紐韻における非唇牙喉音声母字の音声特徴」(『KOTONOHA』241)、丁鋒「慧琳音義中四家文本引《切韻》考」(『岩田』)がある。太田論文は反切上字に重紐対立のない三等韻の字、反切下字に非唇牙喉音声母字を用いる重紐韻反切において、反切母字の重紐帰属の判別に反切下字が関与しているかどうか、原本『切韻』を用いて検証する。丁論文は、慧琳『一切経音義』所収の窺基、慧苑、雲公、慧琳の音義における『切韻』の引用状況から、各作者の『切韻』に対する態度および利用した『切韻』の種類について考察を行う。対音資料を扱った研究としては、橋本貴子「義浄の音訳漢字における Sanskrit の /v/ の音訳について」(『岩田』)がある。義浄の音訳漢字では Sanskrit の /v/ が漢語の並母字で音訳される傾向があり、それがインド東部の方言的特徴を反映している可能性を指摘する。

近世音について。タイ語系の八百語および百夷語を扱った『華夷訳語』の音韻学的研究が更科慎一氏によって進められている。更科慎一「『八百館来文』に見られる八百文字表記漢語について」(『山口大学文学會志』72)は、八百語を扱った『八百館訳語』の「来文」に見える八百文字で表記された漢語音について、北方官話的な特徴が見られることを示す。また八百文字の「高」声調を表す子音字母が漢語の陰平と去声の表記に、「低」声調を表す子音字母が漢語の陽平と上声の表記にそれぞれ多用される傾向があり、ほぼ同時期に朝鮮で編纂された『翻訳老乞大』に記録される16世紀の官話系漢語の調値とよく合うことを指摘する。更科慎一「『百夷館訳語』来文に見られる明代漢語の表音システムについて」(山口大学大学院東アジア研究科編著、森野正弘・富平美波編集『東アジア文化の歴史と現在』白帝社)は百夷文字で表記された漢語音の特徴について論じる。全濁声母の無声化(平声は無声有気、仄声は無声無気)、疑母・微母のゼロ声母化といった北方官話の特徴だけでなく、内転系における -n と -ng の混同という西南官話的特徴が見られる。また曉母・匣母に由来する /x/ の音価が [h] に近く、-m 韻尾の部分的保存、入声韻尾 -p、-t の保存などの南方的要素も見られるという。更科慎一「ベルリン本『百夷館来文』に見える百夷語の資料について」(『異文化研究』16)は、『百夷館訳語』東洋文庫本になくベルリン本の中に存在する8通の「来文」に注釈を付ける。満洲文字資料を扱った研究としては、吉池孝一「漢語音 ts-, tsh- を表記する満洲文字—文字作成手順に反映した満語音韻—」(『KOTONOHA』233)、鋤田智彦「『音韻逢源』の漢字音」(『アルテスリベラレス』110)がある。(橋本貴子)

二、文字・訓詁

単行本では、まず裘錫圭(稲畑耕一郎・崎川隆・荻野友範訳)『中国漢字学講義』(東方書店)を挙げる。本書は『文字学概要(修订本)』(商务印书馆、2013)の邦訳である。原著の初版が出版されたのは1988年であるが、今なお漢字研究において必ず参照される「古典」的名著である。その邦訳が手に取りやすい形で刊行されたことは、日本の漢字研究の進展に大きく寄与するものであると言えよう。次に日本漢字学会編、吉川雅之

編集主幹『漢字系文字の世界 字体と造字法』（花鳥社）を挙げる。本書では漢語派諸言語（広東語・福州語）の新造字・古壮字・チュノム・西夏文字・日本製漢字を例に、主にその造字法を紹介・検討している。文字そのものだけでなく、それによって表記される音声言語との関係性についても注意が払われており、漢字の強い影響下に東アジア各地で行われた、それぞれの言語を文字によって表記する試みを具に知ることができる。本書でも言及されている通り、漢字系文字の研究は翻って漢字について考える上でも重要な示唆を与えてくれるだろう。その意味で、本書と漢字の性質や特徴について鋭い分析を行っている上掲書とが、同時期に刊行されたことは意義深い。

論文では、上古の出土文献を積極的に活用した論考が引き続き数多く発表されている。まず、個別の文字に関する論考としては、金卓「上古中国語における「疾」「病」再考—出土資料による」（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』25）を挙げる。本論文は伝世文献・出土文献の両者を渉猟した上で、〈やまい〉の意味の「疾」が「病」の異体字に由来するという仮説を提示し、秦・漢の文字整理の過程で両者が別字とみなされ、後にそれぞれに意味的な区別がいわば“後付け”されたという。字形・音韻・訓詁など各方面に注意を配りつつ、大胆な仮説を提出している。宮島和也「上古漢語否定詞“無”“毋”及其相關字的演變補説—以戰國秦漢出土文獻為主—」（林範彦・池田巧編『シナ＝チベット系諸言語の文法現象5 否定の多様性』京都大学人文科学研究所）は、否定副詞 {毋} および動詞 {無} の表記の通時的変遷について再検討を行い、{無} が {毋} と同音になったこと、「毋」で {毋} {無} 両者を表記する秦方言によって書記言語が統一されたこと、漢～魏晋時代の古文学派の台頭により「無」が正統的な表記であると見なされるようになったことといった、複合的な要因が作用していたとする。また宮島和也「再論秦文字系統中的「於」—試談秦與六國書面語的接觸影響秦文字書寫的一例—」（『岩田』）は、春秋時代以降の秦を除く東方地域において「烏」が前置詞 {yu} を表記するようになり、尚且つ「烏」の字形が「於」へと変化した後、戦国時代中期に秦が東方地域から前置詞 {yu} を表記する文字として「於」を受容したという。そしてその結果、秦代以降の文字体系では、本来区別の無かった「烏」と「於」が字形上区別され、また前者が {烏} {鳴} 等を、後者が {yu} を表記するという機能分担が生じたとする。

習字書に関しては、福田哲之「北京大学蔵漢簡『蒼頡篇』と漢牘『蒼頡篇』との本文の対応関係」（『中国研究集刊』68）が、北大本『蒼頡篇』の分章を解明するための前提として、新発見の五十五章本と見られる漢牘本との比較を行い、ごく一部を除き両者の本文に対応関係が存在することを詳細かつ実証的に論じている。

そして考古学的視点からの論考ではあるが、西周金文に関する研究として山本堯「殷周金文辨偽新考」（『中国出土資料研究』26）を挙げたい。本論文では著者が近年提唱した金文の鑄造方法に基づき、これまでの金文辨偽の手法の有効性に対して再検討を行い、その問題点を指摘する。また実際に西周後期の真器であることが定説となりつつある「散氏盤（矢人盤）」を多角的な視野から改めて検討し、後世の偽作の可能性が否定できないとする。出土文献を扱う際には文字が記された資料そのものについてもよく把握する必要がある、こうした研究は文字研究にとっても注目すべきものである。

この他、『漢字学研究』10には例年通り「金文通解」として金文の訳注が5本収録され、「古文字学文献提要」では古文字学の大家として著名な林澧氏の研究が紹介されている。また「二〇二〇年古文字学論著目」には当年に出版された古文字学関連の日本語および中国語の単著・専門誌がリストアップされており有用である。（宮島和也）

三、文法・語彙（上中古）

語彙に関する論文として、まず取りあげたいのは、松江崇「揚雄『方言』所収の「北燕」「朝鮮」方言語彙の性質」（『岩田』）である。この論文は前漢末の揚雄の『方言』を資料として、「北燕」「朝鮮」地域に分布する60語の性質を考察した上で、(1)「北燕」「朝鮮」に分布する語彙は、同時にほかの地域に分布する割合が少なく、強い独自性を有すること、(2)「北燕」「朝鮮」語彙のほとんどが漢語の語彙として解釈できること、(3)その一方、僅かながら漢語の枠組みでは解釈し難い語彙もあることを指摘する。本論文は前漢時代の方言区域の語彙の内実を明らかにするための具体的な研究方法を提示しており、漢語およびその周辺に分布する少数民族語の歴史を研究する上で重要な意義をもつ。

戸内俊介「殷代単位詞刍议」（『岩田』）は、殷商時代に個体量詞が成立していたか否かを論じた研究の一つとして位置づけられる。個体量詞の成立時代については、大きく“管前”（＝個体量詞が名詞と分離を開始した段階を基準にする）の立場と、“管後”（＝個体量詞と名詞とが完全に分離して名量詞が成立した段階を基準にする）の立場に基づく議論がある。前者の考えに立った場合でも、殷商時代の甲骨文においてすでに成立したとする見解と、西周以降に成立したとする見解との対立が存在している。戸内氏は殷商の甲骨文と金文を資料として、〈名詞1＋数詞＋名詞2〉構造に現れる助数詞（measure word）（すなわち名詞2）—“丰”、“朋/珏”、“丙”、“卣”—を逐一考察したうえで、これらの助数詞がいずれも〈量〉範疇を含む名詞であり、まだ個体量詞には発展してないことを指摘する。この研究は中国語の個体量詞の成立時期を解明するうえで、重要な判断材料を提示している。

上古漢語の語彙に関する論文として、2018～2019年東京大学に在籍経験のある雷塘洵「先秦汉语的述谓形容词」（『语文研究』第2期）にも言及したい。この論文は、まず統語の特徴から先秦漢語における形容詞の機能を、「体飾（連体修飾語を担う）」、「謂飾（連用修飾語を担う）」、「述体（述語を担う、主語は名詞句）」、「述謂（述語を担う、主語は動詞句）」に4分類する。そして邵永海『《韩非子》主谓结构研究』（北京大学博士学位论文、2002）に従い「謂飾」と「述謂」を主たる機能として持つ形容詞を「述謂形容詞」に分類した上で、その語彙的意味に基づき、「述謂形容詞」の内部に、さらに〈速度〉〈時間〉〈頻度〉〈方式〉〈モダリティ〉という5つの下位分類を立てる。雷氏自身が指摘するとおり、「述謂形容詞」というカテゴリーの確立は、先秦漢語における形容詞の統語的、意味の特徴を解釈する際に有用であろう。また論文の結論部分では、述謂形容詞が徐々に衰退していくとともに、その連用修飾用法から副詞と助動詞が派生するという興味深い現象も指摘している。

上中古文法の論文としては、辛嶋雲青「試論中古漢譯佛典中表示祈願的“使／令”句（『中』）」を取り上げる。この論文では、まず先行研究に基づきつつ、上古漢語において使役を表す「使／令」文には典型的用法（〈NP1 が意識的に NP2 に何らかの行為を行わせる〉という意味を表す）と非典型的用法（〈NP1 の行為により NP2 にはある結果や状態の変化が生じる〉という意味を表す）とがあること、そして中古の「使／令」文ではその〈使役〉機能がさらに漂白化していることを指摘する。その上で、中古漢訳仏典を資料として、「話者の願望」を表す特殊な「使／令」文の存在を指摘し、その統語的、意味的特徴の考察をおこなうとともに、漢訳仏典における原語の対応箇所との検討を通じて、このタイプの「使／令」文がすでに独立した「構文（construction）」として成立していると主張する。願望を表す「使／令」文が構文として独立しているか否かの判断基準については議論の余地があるものの、「使／令」文の通時的発展のプロセスにおいて、文脈による影響がいかなるものであったのかを明らかにするうえで、本論文は有益な視点を提示している。

文献資料の訳注としては、谷中信一『『老子』河注・王注全訳解』（汲古書院）や馬王堆出土文献訳注叢書編集委員会編、池田知久・李承律『易〔上〕六十四卦、易〔下〕二三子問篇／繫辭篇／衷篇／要篇／繆和篇／昭力篇』（東方書店）が刊行された。今後これらの文献資料を扱う際の参考となろう。

また、山田大輔「仏教漢文を読む（六）一失訳『雜譬喻經』卷下校注訓訳稿」（『火輪』43）は、中古漢語の資料『雜譬喻經』に訓読・現代日本語訳を加えるとともに、漢語史の観点から注釈を加えたものである。（楊安娜）

四、文法・語彙（近代）

ここでは民国期までの資料を対象とする研究について概観する。本土資料では、木津祐子「『官話』再読」（『中』）が明清期の文献における官話に関する記述から、当時の官話が文言的表現と共起することで格式と優雅さ、教養ある挙動を象徴し、そうした話術の獲得が官話学習の目標であったのが、中国の社会構造の近代化により、“官話”の核心要素が口語的融通無碍さへと変化し、口語「官話」が通用言語として機能していくプロセスがあったと推測する。千野万里子「叶圣陶の言語について（4）：書き換え作業と普通話、進行・持続表現を中心に」（『杏林大学外国語学部紀要』34）は、下江官話の作品『稻草人』の進行・持続の表現は、原作品の“在”“在那里”“正”“正在”“着”“呢”が、普通話への修正後に、従来から進行を表す“着”の動態助詞型と新興語の“在”とその強調表現“正在”の副詞型に集約されたが、北京語作品『骆驼祥子』がほぼ“着”の動態助詞型のみであるのと対照的で、元々多様な進行・持続の表現を用いた叶圣陶の言語習慣が影響したと指摘する。竹越孝「語彙交替と文法形式－飲食動詞の変遷を例として－」（『岩田』）は、『老乞大』『朴通事』『金瓶梅詞話』における飲食動詞の使用状況から、その通時的変遷は「飲む」領域における“喫”から“喝”への語彙交替であり、数量表現の修飾を受けてリアルに具体的動作を表す“喝”系動詞が、意味拡張プロセスを経て、抽象的意味を表す“喫”から交替したメカニズムを提示する。

唐通事資料では、木津祐子「『把』字句から見る長崎唐通事資料」(『岩田』)は、長崎唐通事資料で「把」を用いる使役構造の基本機能が、物や条件が恩恵として与えられた行為者が被授与者として動作を行うことだと指摘し、“叫”“教”を用いる使役文とは異なると指摘している。泰西資料では、楊一鳴「从翟理斯《华英字典》的修订看国語的近代化」(『文化交渉：東アジア文化研究科院生論集』12)は、ジャイルズの『華英字典』1892年初版から1912年第二版にかけての、俗語、フレーズ、宣教師由来語彙、日本語借用語など多岐にわたる12,122語の見出し語の増加は、外来の新概念が吸収され中国語で新語が爆発的に増加・蓄積した当時の言語状況を反映したものと指摘する。千葉謙悟「フライヤー等編 *Syllabary for the transfer of foreign names into Chinese* の音譯漢字について」(『中國文學研究』48)は、フライヤー等が1890年から1892年に編んだ *Syllabary* は、来華宣教師等による訳語統一運動が隆盛した時期に音訳語の標準化を目指した試みで、近代語彙創造の一環としての先駆性があったと指摘する。

近代の翻訳語では、田野村忠温「日本語の漢語の文法的特異性とその中国語への影響：「設計」の近現代語史」(『大阪大学大学院文学研究科紀要』62)が、「設計」という語彙が、明治初年の日本語において中国語の動詞句に基づき一語化された用法が創出され、19世紀末以後に中国に伝播・普及し、日本語に倣って他動詞として目的語を取るようになったとし、日中間の語彙交流と同時に文法交流の事例でもあると指摘した。

日本近代の漢語教科書を扱った研究としては、楊璇「《北京官話：今古奇観》改編による語彙の書き換えから見た清末北京語文法」(『東アジア国際言語研究』3)は、17世紀の白話小説選集『今古奇観』が北京官話の教科書として編まれた際に、北京語の口語で“被”を使用しない言語状況を反映して原作の“被”が“叫”に改められたことを指摘する。また石崎博志「『北京官話全編』の談話分析「辞去」の場面を中心に」(『關西大學中國文學會紀要』43)は、会話本文における辞去の応酬に、送り手が辞去を容認する発言や、辞去の行動自体を言語化する中国語の特徴が見られる一方、日本語で一般的な感謝や謙遜の表現が全く無く、日本語の言語習慣からの転移がないと推断し、『北京官話全編』が清末官話による自然な談話展開が記述された資料である可能性を指摘する。

資料の翻字・影印では、竹越孝『五卷本『庸言知旨』校注』(神戸市外国語大学外国語研究所)は、満漢合璧の満洲語教材『庸言知旨』の五卷鈔本について現存諸本を校合したもので、満洲文字のローマ字転写と逐語訳、漢字部分の翻字からなり、満洲語・中国語史の資料としての有用性がある。永井崇弘「关于拉沙汉译《嘉音遵囑吡菩薩之語》中“的”与“了”的用法」(『福井大学教育・人文社会系部門紀要』6)は、前回展望に挙げた永井崇弘・塩山正純『ラサール訳『嘉音遵囑吡菩薩之語』一研究と影印・翻刻一』(あるむ)をもとに、同書の漢訳本文の“的”が粵語の“吡”の用法であることから、その口語要素が白話ではなく粵語由来である可能性が高いと指摘する。

(塩山正純)

五、文法・語彙(現代)

2022年は特に文法論について数多くの研究成果が創出された。まず、「完了」を表す

とされる動詞接尾辞“了”（もしくは文末助詞“了”）の有無と文全体の時間性との関連に着目する論考をいくつか取り上げる。前田恭規「動量詞とアスペクト無標識完了表現」（『中』）は、“他瞪老头子一眼，（一扭脸走了）”のように動量詞が目的語に後置される形式「V + O + 動量詞」について、当該形式がアスペクト標識を伴わずに完了を表し得ることを確認し、その際の使用環境や、〈已然〉と解釈される動機を考察する。当該の形式に頻用される動量詞の種類に偏りが見られることをコーパス調査によって示した上で、〈已然〉の解釈の要因を当該形式が使用されるコンテキスト上の特徴に求め、動量詞の使用頻度の偏りについてもこれにより説明可能であるとする見解を述べる。木村英樹「“現在”の射程」（『現』）は、「〈現在〉の出来事」として認識され得る事態は言語によって異なり得るという前提に立ち、中国語の“現在”について、当該の時間詞が現れる多様な表現の共通点を踏まえ、「ある状況が〈いま、ここ〉に存在する」ということを表すための時間詞であるとしてその特徴を記述する。動詞接尾辞“了”に“已经”が共起する表現、文末助詞の“了”を伴う表現、“要”“就”“快”の何れか（もしくはこれらを様々に組み合わせた形式）が文末助詞の“了”と呼応する表現等が、いずれも“現在”と共起可能であるのに対し、“已经”を伴わずに動詞接尾辞の“了”を用いると“現在”との共起が制限されるという現象を記述した上で、このような制限の差異が生じる要因について、基準時に存在する「状況」に着目するのか、出来事自体の時間的局面に着目するのかという各表現の叙述特性との関連を論じている。

構文論に関わる論考にも独自性の高い議論が数多く見られた。池田晋「〈PVP 的 N〉構文の形式と意味」（『現』）はその一つであり、“你开你的会”のように、同一の人称代名詞を主語と目的語名詞句内の修飾語において繰り返し用いる形式（PVP 的 N）を考察対象とする。意味論及び談話論の特徴を整理し直し、“P 的 N”は実質的に“P 的 VN”と解釈される構文であることを指摘した上で、その基本的意味は、「P 自身に割り当てられた VN を P が自ら選択し実行する」であると分析する。その上で、この中心的意味に基づいて、当該形式が並列される場合の含意（「互いに干渉しない」）と、単独で用いた場合の含意（「他人や他の事に構わない」）が生まれる仕組みを説明する。伊藤大輔「“跑不了他那么快”について」（『中教』）は“跑”のように自由に目的語をとることのできない動詞を「自動詞」と規定し、当該成分が“V 不了 N 那么 Adj”のパターンにおいて V として現れる、“跑不了他那么快”のような表現の構造について、V に他動詞を用いる“吃不了他那么多”と統一的に扱い得ることを指摘する。特に“N 那么 Adj”については数量表現の一種と見做し、その上で、動詞を名詞のサブカテゴリーに位置づけ、目的語を補語の一種と捉え直す沈家煊の文法体系に基づきながら、当該の数量表現を結果補語として扱い、“跑不了他那么快”の成立が“V 得 Adj”からの類推によるものであるとする解釈を提案する。毛興華「ヴォイスの観点から見る SVOle 形式の成否条件」（『汉语与汉语教学研究』13）は、“?? 小李推倒小王了”のような表現の不成立要因について、コーパス調査を踏まえた分析結果を提案する。特に構造と意味の対応関係に着目し、“SVO 了”の構文においては客体に対する影響を表す場合には“推倒（押し倒す）”等、動詞に結果を表す補語成分が結合した構造（以下、VR と記す）との

適合性が低く、これとは相補的に、ヴォイスの変更を伴う有標構文(“把”構文、“被”構文)においては客体への影響を表すVRが高い適合性をもつことを指摘している。更には、VRが再帰的影響を表す場合は、有標構文、無標構文における適合性の差異が見られにくいとし、その理由について、この種のVRに対しては行為等の影響を被る受影者の解釈において主体と客体の区別が中和されるためとする解釈を提案する。

発話者の事態把握と表現形式との関連に関心を置く議論にも目を引くものが多く、上掲の諸論考の他、郭嘉璋「中国語の可能補語“V得/V不了(liǎo)”の意味機能—機能的分析を中心に—」(『中』)もその一つと言える。当該の議論は“V得/V不了”がもつモダリティの意味について、「完了・消失」の意味をスコープに含むか否かにより2類に分け、更に、含まないタイプについて、VPを実現させる意志の有無に基づき2種類(即ち、①意志はあるもののVP実現の条件が備わっていないことを表す動的モダリティと、②VP成立の真偽に対する話し手の判断を表す認知的モダリティ)に区分する。これにより、特に①、②の解釈の相違が生じる要因について、単に形容詞や動詞といった述語の語彙範疇の相違に基づくだけでは説明困難であるが、例えば同一の“去”という動詞であっても、「(行きたくても)行けない」という場合のように意志性がプロファイルされれば①、そうでなければ②の解釈が可能である、というように、事態のプロファイルの仕方に基づく説明が有効であると主張する。加えて、“能”や“会”等の助動詞との比較を通じ“V得/V不了”独自のモダリティの意味を分析する。

コーパス調査に基づく実証的研究にも豊富な成果が見られる。長谷川賢「接続詞“所以”の使用傾向」(『現』)は、中国語の因果関係を表す複文では接続詞の使用を必要としないのが一般的であるとする定説を踏まえ、結果節を導く接続詞“所以”を用いる際の動機付けについて考察する。併せて、小説資料から成るコーパスを用いて“所以”の使用傾向を丹念に分析し、結果節の事態が「意外性」という談話上の特徴を持つことや、原因・理由節の形式が複雑なものであること等を指摘し、一連の特徴と使用動機との関連について合理的な解釈を与えている。吉甜「動補関係の日中同形語の相違—目的語の使用を中心に—」(『日中言語対照研究論集』24)は、語彙研究にコーパス調査を導入するものであり、具体的には、動補構造の他動詞として現れる日中同形語として“延長”“拡大”“縮小”の3語を選定し、これらと共に共起する成分の意味や概念領域を考察すると共に、動補構造の語の生産性という観点から両言語を比較し、日本語と中国語とは語構成の分析的特徴に差異を持つという従来説に裏付けを与えている。対照研究にはこの他にも多くの啓発的な論考が見られる。例えば、井上優「行為要求表現の形式と意味」(近藤泰弘・澤田淳編『敬語の文法と語用論』開拓社)は、依頼や提案等の場面において日本語では「してくれるか」「しうか」等の疑問文が、中国語では“……吧(促しを表す文末助詞)”を伴う勧誘文等の行為指示文(命令文、依頼・勧め文を一括して指す)が用いられやすいことを指摘する。その上で、当該現象に対する従来の解釈(中国語では意味的に直截的な表現が、日本語ではひかえめな表現が多用される)について、直接的な表現の意味的な直截さの度合いは、中国語より日本語の方が高い等、両言語における「直截さ」や「ひかえめさ」を同一の尺度の中で位置づけた場合には異なる結論

が得られるとし、同一場面で適用される表現の言語による相違について論を展開する。

(加納希美)

六、方言

冒頭に掲げた『岩田』は、方言の方面においても極めて充実していることは評者の贅言を要しない。紙幅の都合で各個の論文の紹介は割愛するが、多くの重要論文が掲載されていることは強調しておきたい。

「文字・訓詁」部門ですでに取りあげた『漢字系文字の世界 字体と造字法』は、中国語以外の言語を扱う部分が多く、方言を第一の主題とするものでもない。しかし所謂「方言字」の存在からも自明のように、音声言語の表記にまつわる問題は標準変種に限定されない。「方言字」を含む漢字の応用的・発展的使用の総体については音声言語としての方言の知見なくしては分析を深化できない。方言と深く関わる学際的な主題を扱う文献として、同書にも言及しておきたい。

次に論文を挙げる。音声・音韻関連の論文が多く見られた。共時的な音韻論については、まず呉璇歆「広東語話者および北京語話者による標準中国語 2 音節軽声語の産出について」(『言語文化共同研究プロジェクト 2021』、大阪大学)が、標準中国語の 2 音節語の軽声を、“子”など生産性の高い接尾辞に担われた、出現予測の容易な「規則軽声」と、形態素自身に予測の根拠を求めにくい「不規則軽声」に分類したうえで、広東語母語話者が北京語母語話者に比べ、不規則軽声を誤読しやすいことなどを自然談話のデータに基づき論ずる。John Alderete et al. “The Morphology of Cantonese “Changed Tone”” (『言語研究』 161) は、広東語の 2 つの“変音”(形態論的な調値変化)、すなわち高平板調化と高上昇調化のメカニズムを最適性理論 (Optimality Theory) で統一的に説明することを試みる。超分節的な音韻現象 (具体的には連続変調) については OT に基づく考察の蓄積があるが、粵語の超分節的現象を OT で論じた研究は管見の限り過去に存在しない。張玲「瀘州方言の音声・音韻体系について」(『神戸市外国語大学研究科論集』 25) は四川省瀘州市の官話の音声・音韻を共時的に記述する。同方言の入声 (23 調。閉鎖音韻尾を失うも舒声と未合流) については、由来する調類が入声か舒声かにより、分節音に音声学的な相違が規則的に生ずるという、通時的観点からも興味深い現象も報告している。大西博子「南通金沙方言双字调中的入声」(『近畿大学教養・外国語教育センター紀要・外国語編』 13(1)) は、陰入と陽入が対立し、かつ、声門閉鎖音韻尾を保存する江蘇省南通市の金沙方言について、老年層と若年層の母語話者各 1 名から得たデータに基づき、二音節語中の入声字の音長が舒声字と同等なほどに長くなっていることを示す。

音韻史については、秋谷裕幸「原始闽东区方言的 *yai 韵及其相关问题」(『中』) が、蒼南方言と隆都方言 (後者の音韻データを含む秋谷「廣東中山市隆都方言の歴史音韻特點及其歸屬」(『聲韻論叢』 28) もまた 2022 年刊) に基づき、閩東北片祖語に *ya を、さらにその古形として閩東祖語に *yai を再建する。この閩東祖語 *yai は先行研究の再建案 *iai を、当該 2 変種に見られる円唇性に基づいて改めたものであり、閩祖語から閩

東祖語への音変化 **iai > *yai を、沿海閩語内部で閩東語を閩南語・莆仙方言から分か
つ改新と位置づける。

文法については、趙葵欣「汉语方言“什么”类疑问词列举用法的类型与分布」(『中国
言語文化学研究』11)が“什么”類の疑問詞を用いた列挙表現について、その地理的
分布や語順の類型を、現地調査とアンケート調査から得られた81地点のデータから分析
する。北方変種(官話)は羅列される語に対して疑問詞を前置も後置もすることが可能
な地点が多い一方で、南方変種(非官話)は前置のみが可能な地点が多く、そもそも疑
問詞を用いた列挙表現を使わない変種が南方変種に多い(約3割)ことを示す。渡邊俊
彦「台湾華語における台湾閩南語の句首助詞「啊」の共起に関する一考察—動詞「説」
を論の中心として」(『拓殖大学台湾研究』6)は、政治討論番組の公式Youtubeチャ
ンネルの会話データから得た“啊”の45個の用例に見出された、台湾華語の句首助詞
(句頭語気助詞)“啊”と発話義の動詞“説、講”や“覺得”との共起現象を根拠として、
“啊”が他者の発話の回想や代弁、話題中のより細部の話題への転換などの用法を持つ
ことを示す。

言語社会学方面の研究として、小田格「中華人民共和国江西省における方言番組をめぐ
る政策について」(『人文研紀要』102)は、江西省での方言番組の拡大と中止、そし
て省級局の先導による再発展という2000年代半ばの変遷の様子を、当時のテレビ年鑑
や新聞記事、各種の行政文書などから復元する。加えて、贛州市での客家語番組の出現
を90年代以降の贛州市における客家を巡る言説の抬頭と関連付ける。(濱田武志)

七、教育

まず、中国教育部中外語言交流合作中心(編)『国際中文教育中文水平等級標準』
(2021)の日本語翻訳版である古川裕監訳・古川典代訳『国際中国語教育中国語レベ
ル等級基準』(アスク出版)を取り上げる。原著は、外国人学習者に対する中国語教育の
最新のガイドラインで、“三等九級”にレベル分けされ、音節・漢字・語彙・文法の各
分野で習得すべき目標が明示されている。各等級「言語コミュニケーション能力」「話
題とタスク」「数量化指標」により基準が示され、“听”“说”“读”“写”に“译”を加
えた5技能の指標が記される。翻訳版では、“三等九級”のレベル分けと指標が第三版
(HSK3.0)に対応しているであろうこと、「外国人のための中国語教育」の呼称が“対
外汉语教学”から“汉语国际教育”を経て“国际中文教育”へと変遷した大きな動きに
ついて言及している。

次に、2021年に実施された中国語教育学会全国大会のシンポジウムの報告2篇を取
り上げる。シンポジウムでは日本の中国語教育をふり返るテーマが選ばれており、内田
慶市「中国語教育と検定試験」(『中教』)は、日本で実施されている中国語関連の各種
検定試験を概観した上で、「中国語検定試験」と「HSK」の違いについて多方面から比
較する。また検定試験と基準の関係についても言及し、学習基準・ガイドラインについ
ての議論の必要性を指摘し、日本における検定試験の歴史と中国語教育との関係につい
てもふり返る。紅粉芳恵「「再考 日本中国語教育」報告」(『中教』)は、「教科書の

視点から」とテーマを定め、出版社4社との意見交換の場が設けられたことを報告する。COVID-19の影響で教育環境が激変する中、教科書の現状および教科書と中国語教育のこれからについて各社の見解が述べられる。

教材研究からは、2篇の論文を取り上げる。柳素子「韓国の中学校・高等学校「中国語」教科書の分析—『2015年改訂教育課程』に基づいて—」（『複言語・多言語教育研究』10）は、韓国の中学校・高等学校の教科書の語彙・文法・表現項目について量的・質的分析を行い、日本の『学習指導要領』に相当する韓国の『2015年改訂教育課程』と、どのように対応しているのか調査した。分析から優先的に指導すべき基礎的な内容が示唆され、時間的に制限がある日本の高等学校の中国語教育の参考になるのではないかと述べている。習得研究と教材研究をかけあわせたものには、路浩宇・韓涛「论“有”字句的习得偏误与教科书编写的关联性—以日本本土汉语教科书的调查为例—」（『中教』）がある。この研究では「存在」を表す“有”構文について、初級の学習者を対象にアンケート調査を実施し、学習者に多い誤用を4分類した。そして教科書の分析より、“有”構文の文法説明や例文の設定、文法項目と構文の導入順序等の問題点を指摘し、学習者の誤用を避けるための改善案を提言する。

実践研究からは4篇の論文を取り上げる。まずICTを活用した教育実践から、2篇を取り上げる。許挺傑「中国語の発音指導期におけるブレンド型授業の実践報告—中国語音声の知覚能力への影響を中心に—」（『中教』）では、発音指導期に、Zoomによるオンライン授業・復習用動画・オンライン課題を組み合わせた「三位一体ブレンド型授業」を導入し、対面授業、オンライン授業のみの場合と比較した。その分析により、学生の授業外の学習が促され、発音小テストの結果からブレンド型授業は他の授業形態と比べ総合的に高い学習効果が得られ、難易度の比較的高い声調・子音・母音の書き取り問題については、ブレンド型授業がより有効であることが確認された。楊彩紅・刘勤「中日大学生线上交流活动实践研究—对中日双向问卷结果的分析—」（『中教』）では、日本の大学の中国語学習者と中国の大学の日本語学習者間で、Zoomを用いた交流活動を実施した。交流活動は、當作靖彦・中野佳代子執筆担当『外国語学習のめやす2012 高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』（国際文化フォーラム、2012）に基づき設計され、活動後に行ったアンケート調査の結果より、『めやす』の掲げる「3領域×3能力+3連繫」各方面において取獲があったことを報告する。

単艾婷「ブックレポート活動を取り入れた中国語授業の試み—その可能性と課題—」（『中教』）ではブックレポート活動を実施し、学習者の産出物・行動観察記録・質問紙調査結果・ふり返しシートを分析した。その結果、学習者が困難を覚えるのは、語彙・文法および読解そのものに起因することが示される。また一方で、ブックレポート活動が学習者の特性を活かし、総合的な中国語コミュニケーション能力をのばすきっかけとして有効に働いた可能性が考察される。その他、青木隆浩「中学校における必修科目としての中国語の取り組み—昭和女子大学付属昭和中学校グローバル留学コースの実践報告—」（『複言語・多言語教育研究』10）では、大変稀有な中学校での中国語教育の実践を報告する。

（小川典子）

【付記】『日本中国学会報』第七十四集に掲載された「学界展望（語学）」に誤記がありましたので訂正いたします。61」頁16行目（誤）『嘉音遵口罵口挑菩薩之語』（正）『嘉音遵囉吽菩薩之語』